

ほうじょうき
方丈記(一)

かもちようめい
鴨長明

行く河の流れは絶えずして、しかもこの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人と栖と、又かくのごとし。

たましきの都のうちに、棟を並べ、甍を争へる、高き卑しき人のすまひは、世々を経て尽させぬ物なれど、是をまことかと尋ねれば、昔しありし家はまれなり。或は去年焼けて今年作れり。或は大家滅びて小家となる。住む人も是に同じ。所もかはらず、人も多かれど、

古見し人は三十人中に、わづかに一人二人なり。朝に死に、夕に生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。不知、生れ死ぬる人、いづかたより来りて、いづかたへか去る。

また不知、仮の宿り、誰が為にか心を悩まし、何によりてか目を喜ばしむる。その主とすみかと、無常を争ふさま、いはば朝顔の露に異ならず。或は露落ちて花残り。残るとい

へども、朝日に枯れぬ。或は花しぼみて露なほ消えず。消えずと言へども、夕を待つ事なし。

予もの心を知れりしより、四十余りの春秋を送れる間に、世の不思議を見る事、やゝ度々になりぬ。去安元三年四月廿八日かとよ。風はげしく吹きて静かならざりし夜、戌の時許、都の東南より火いできて西北に至る。果てには朱雀門、大極殿、大学寮、民部省などまで移りて、一夜のうちに塵灰となりにき。火元は樋口富ノ小路とかや。舞人を宿せる

仮屋よりいできたりけるとなん。吹き迷う風に、とかく移りゆくほどに、扇を広げたるが

ごとく末広になりぬ。遠き家は煙にむせび、近き辺はひたすら焰を地に吹きつけたり。空には灰を吹き立てたれば、火の光に映じてあまねく紅なる中に、風に堪へず吹き切られたる焰、飛ぶが如くして一二町を越えつゝ移りゆく。其中の人うつし心あらむや。或は煙にむせびて倒れ伏し、或は焰にまぐれてたちまちに死ぬ。或は身ひとつからうじてのがるゝも、資財を取り出づるにはおよばず。七珍万宝さながら灰燼となりなき。其の費えいくそばくぞ。其のたび、公卿の家十六焼けたり。まして其外数へ知るに及ばず。惣て都のうち三分が一に及べりとぞ。男女死ぬるもの数十人、馬牛のたぐひ辺際を不知。人のいとなみ皆おろかなるなかに、さしもあやふき京中の家を作るとて、宝を費やし、心を悩ます事は、すぐれてあぢきなくぞ侍る。

又治承四年卯月のころ、中御門京極のほどより、大きな辻風おこりて、六条わたりまで吹ける事侍りき。三四町を吹きまくる間にこまれる家ども大きなも小さきも一つとして破れざるはなし。さながら平に倒れたるもあり。桁、柱ばかり残れるもあり。門を吹きはなちて四五町が外におき、又垣を吹きはらひて隣と一つになせり。いはむや、家のうちの資財、数を尽くして空にあり。檜皮、葺板のたぐひ、冬の木葉の風に乱るるが如し。塵を煙の如く吹きたてたれば、すべて目も見えず。おびたしく鳴りどよむほどに、もの言ふ声も聞えず。彼の地獄の業の風なりとも、かばかりにこそはとぞおぼゆる。家の損亡せるのみにあらず、是をとりつくろふ間に、身をそこなひ、片輪づける人、数も知らず。この風末の方に移りゆきて、多くの人の嘆きなせり。辻風はつねに吹く物なれど、かゝる事

やある。たゞ事にあらず、さるべきものさとしかなどぞうたがひ侍りし。

又治承四年水無月の比、にはかに都遷り侍りき。いと思ひの外也し事なり。おほかた此の京のはんじめを聞ける事は、嵯峨の天皇の御時、都と定まりにけるよりのち、すでに四百余歳を経たり。ことなる故なくて、たやすく改まるべくもあらねば、これを世の人やすからず憂へあへる、実にことわりにも過ぎたり。されどとかくいふかひなくて、帝よりはじめたてまつりて、大臣公卿みな悉くうつろひ給ひぬ。世に仕ふるほどの人、誰か一人ふるさに残りをらむ。官位に思ひをかけ、主君のかげを頼むほどの人は、一日なりともくうつろはむと励み、時をうしなひ世にあまされて、期する所なき者は憂へながらとまりをり。軒を争ひし人のすまひ、日を経つゝ荒れゆく。家はこぼたれて淀河に浮び、地は目の前に畠となる。人の心みな改まりて、たゞ馬鞍をのみ重くす。牛車を用する人なし。西南海の領所を願ひて、東北の莊園を好まず。その時おのづから事のたよりありて、摂津の国の今の京にいたれり。所のありさまを見るに、その地ほど狭くて、条里をわるにたらず、北は山にそひて高く、南は海近くて下れり。波の音つねにかまびすしく、塩風ことにはげし。内裏は山の中なれば、彼の木丸殿もかくやと、なかなかやうかはりて、優なるかたも侍り。日々にこぼち、川もせに運び下す家、いづくに作れるにかあるらむ。なほむなしき地は多く、作れる屋は少なし。古京はすでに荒れて、新都はいまだならず。ありとしある人は、皆浮雲の思ひをなせり。もとよりこの所にをるものは、地を失ひて憂ふ。今移れる人は、土木のわづらひある事を嘆く。道のほとりを見れば、車に乗るべきは馬に乗

り、衣冠いくわん、布衣ほいなるべきは多く直垂ひたたれを着たり。都みやこの手振りてぶたちまちに改まりて、たゞひな
びたる武士もののぶにことならず。世よの乱るゝ瑞相ずいさうとか聞けるもしるく、日ひを経つゝ、世中よのなか浮き立
ちて、人の心こころもをさまらず。民たみの憂うれへつひにむなしからざりければ、同じき年の冬ふゆ、なほ
この京みやこに帰り給ひにき。されどこぼちわたせりし家どもは、いかになりけるにか。悉たゞしいくも
との様にしも作らず。伝つたへ聞く、古いにしえの賢かしこき御世みよには、あはれみを以て国くにを治め給ふ。す
なはち殿かやに茅かやふきても、軒のきをだにとゝのへず、煙けぶりの乏とちしきを見給ふ時は、かぎりあるみつ
き物をさへゆるされき。是これ民たみをめぐみ、世よをたすけ給ふによりてなり。今の世よのありさま、
むかしになぞらへて知りぬべし。